

ロンドンのコクニィについて

(江戸弁との対照において)

井 上 敬 一

1.

Cockney を、ちょっと、手近かな「イッセンシアル英和辞典」で引いて見ると、「①きっすいのロンドンっ子、ロンドンなまりのある（下層の）ロンドン人、②ロンドン言葉、③低級な都会人」とある。また英々辞典“THE NEW METHOD ENGLISH DICTIONARY”で引くと、“a special way of speaking English common among the lower classes in London, a person born in London”と出ている。前者の①は、これを訳したものらしい。いづれも、「下層」とか、「低級」とかが、ちょっと引っかかるが、ともかくこの名称はロンドンにかかわるものには違いない。

ロンドンのコクニィと云えば、おのづから対照的に連想されるものは、いわゆる江戸っ子弁である。それで本文においては、思い出されるままに、江戸弁を対照的に考えて、コクニィについて述べてみたいと思う。その方が便宜でもあるし、面白く書けると思うからである。また、ロンドン以外の地方や、オーストラリア、ニュージーランドにも、コクニィに似たような発音で話される dialect があるが（オーストラリア人も“ei”の音を“ai”と発音するが、dialect としてロンドンのコクニィと相違する点が可成ある）、本文ではそれらには触れず、ロンドンのコクニィに限定して話を進めて行くことにする。

さて、コクニィと云えば、“ei”の音を“ai”と発音することぐらいは、英会話をやる人なら誰でも知っていることだし、私も実はコクニィについてはそのくらいに思っていた。つまりコクニィでは、“ace”と“ice”と同じ発音で、どちらも「アイス」となり、“paper”は「パイパー」，“Spain”は「スパイン」で，“today”に至っては、発音は「トゥ・ダイ」(to die)だから，“I’m going to the hospital today”だと、コクニィでは、「私は今日病院へ行くところだ」ではなくて、「私は病院へ死にに行くところだ」と聞える。縁起でもない。

“エイ”を“アイ”と発音することは、いなせな江戸弁で、“アイ”を“エー”と云うのと丁度逆である。魚河岸などで、「きょうは鯛はないんだ、帰りな」と云うところを、「きょうはテーはネーンダ、ケーナ」となるようなものである。コクニィは第一、アルファベットの名称さえ、「エー、ビー、シー」ではなくて、「アイ、ビー、シー」である。しかしコクニィの人でも、単語の spelling など云うときは、“a”と“i”とが同じでは困るので、“a”は、apple の a とか、“i”は ink の i とか何んとか云って区別している。これも丁度、日本の東北では、「す」と「し」とが同音（「おすし」は「オスス」、「新聞」は「スンブン」）だから、字の区別のためには、「す」は巻いた「ス」、「し」は長い「ス」とか云うのと同じである。

私は、ロンドンには戦後7回（トランシットも入れて）行ったが、はづかしながら、その割には不勉強で、ロンドンの言語差には最初余り気づかずだった。それは最初の2～3回目までは、Russell Square のホテルに居て、コクニィを余り耳にしなかったためでもある。3回目からは、経費節約の意味もあって、下町の SOUTH KENSINGTON の B & B (“Bed and Breakfast” 短期宿泊用民宿、ただし、小さなホテル程度のやや高級？なものもある)を使うようになって、よくコクニィを聞かされた。コクニィに関心を持ったのはそれからである。

3度目のロンドンで滞在したB & Bのおやじが生粋のコクニィで、私にはわかり易い標準英語を使ってくれたが、それでも所々コクニィがまじり、“That’s OK”を「ザッツ、オー、カーイ」と云った。もし全部コクニィでやられたら、半分もわからなかったに違いない。それもその筈、“ei”の音を全部“ai”と云われたら、とても意味がとれないだろうし、その上、コクニィには標準語とちがった特種の vocabulary がどっさりあるのだから。江戸弁にも他地方にはない独特のコトバがある。魚河岸から出た「^{さば}鯖をよむ」(数をゴマカス)なども関東以外では通じないかも知れない。しかしコクニィの場合、そんな生やさしいものではなく、その実例を見るとむしろ隠語 jargon か cant に近い。

コクニィを単なる slang と片づけてしまえばそれまでだが、コクニィは、江戸っ子とそのコトバを誇りにしている如く、ロンドンっ子の自慢でさえあり、伝統を守ることの強いロンドンっ子には、絶対に捨て去れないものなのである。東京では、生粋の江戸弁は、寄席にでも行く以外に、今は下町でも中々聞けなくなったが、コクニィはロンドンではまだまだ庶民の間で話されている。そこで私は持前の好奇心から、コクニィをもう少しよく知るべく、まる1日足を棒にしてロンドン市中の書店を廻り、コクニィの文献又は資料を探し歩いた。わざわざ^{チューブ}地下鉄に乗ってロンドンの書店街、^{トッテナム}TOTTENHAM へ行き、そこで一番大きな FOYLES を始め、本屋を一軒一軒見て廻った。ところが中々見当らない。たまに書名はわかってても(例えば、Julian Franklyn’s “A Dictionary of Rhyming Slang”), out of print とか、sold out とかで、本屋の方でも、コクニィの本はないかとたづねても、余り取合ってはくれなかった。それもその筈、彼ら自身のコトバだから、特に興味がないのは当然だ。しかし苦心の甲斐あって、帰途小さな本屋でやっと手に入れたのが、“RHYMING COCKNEY SLANG”と題する small glossary 一冊である。それを見ると、その語彙なるものが、まるで隠語かクイズのように、一般英語で用い

られる意味とおそろしくちがっているのに驚いた。これでしゃべられたら、普通の英語智識では、先づ絶対にわかりっこない（オット失礼、これは私の英語智識を標準にしたものです）。そこで、実証のために、そのうちから、A B C 順で、いくつか例を挙げると――

（左の 2 語、特にあとの語と、右の単語とにご注意）

Adam and Eve — Believe

Abergavenny — Penny

Andy Cain — Rain

Anna Maria — Fire-domestic

Apple Fritter — Bitter, Beer

April Fools — Stools, Pools, gambling

April Showers — Flowers

Aristole — Bottle

Army and Navy — Gravy

Auntie Ella — Umbrella

Balloon-Car — Salloon Bar ~ Meet me in the balloon.

Band of Hope — Soap

Barnet Fair — Hair ~ I must get me barnet cut.

Bat and Wicket — Ticket

Bazaar — Bar, Public house

Bear's Paw — Saw, tool

Bees and Honey — Money ~ I ain't got the bees to pay me rent.

Biscuits and Cheese — Knees ~ She ain't 'arf got knobbly biscuits.

Bread and Cheese — Sneeze

Butcher's Hook — Look ~ Let's 'ave a butcher's at it.

Cain and Abel — Table

Captain Cook — Book

Carving Knife — Wife

Cash and Carried — Married

Cat and Mouse — House

Cherry Hogg — Dog ~ Me cherry's 'aving pups.

Cocoa — Say so

Cockroach — Coach

Conan Doyle — Boil (verb and noun)

Country Cousin — Dozen

Daffadown Dilly — Silly

Daily Mail — Tale

Daisy Roots — Boots ~ That's a smart pair of daisies.

Dickory Dock — Clock

Dicky Bird — Word

Dicky Dirt — Shirt ~ Where's me clean dicky?

Dig in the Grave — Shave

Ding Dong — Song

Dog and Bone — Phone

Duchess of Fife — Wife ~ She's me old Dutch.

Early Hours — Flowers

Earwig — Understand twig

Eighteen Pence — Sense

Elephant Trunk — Drunk

Field of Wheet — Street

Fine and Dandy — Brandy

Fisherman's Daughter — Water ~ Gimme a drink of fisherman's.

Four by Two — Jew

Frog and Toad — Road ~ I'm going up the frog.

Garden Gate — Magistrate

Gay and Frisky — Whisky

German Bands — Hands ~ Me Germans are cold.

Ginger Beer — Engineer

Greengages — Wages ~ I'll pay you back when I get me greens.

Hampstead Heath — Teeth ~ Like me new 'ampsteads/'amps?

Harry Randll — Candle

Harvy Nichols — Pickles

Hit and Miss — Piss/Kiss

Holy Friar — Liar

Iron Hoof — Pouf — effeminate male ~ 'e's a bit of an iron.

Iron Tank — Bank

Isle of Wight — Right

I suppose — Nose

Jack Jones — Alone ~ 'e's all on 'is Jack.

Jack the Ripper — Kipper

Jim Skinner — Dinner

Jimmy Riddle — Piddle ~ I'm just going off for a Jimmy.

Kate and Sydney — Steak and Kidney

Kate Karney — Army ~ I'm joining the Kate.

Kidney Punch — Lunch

Khyber Pass — Arse ~ 'e can stick that up 'is khyber!

Lilian Gish — Fish

Linen Draper — Paper, newspaper ~ 'as the linen come yet?

Lion's Lair — Chair

Loaf of Bread — Head ~ Use yer loaf.

Macaroni — Pony, £25

Marie Correlli — Telly, TV set

Mince Pies — Eyes ~ She's got lovely minces.

Monkey's Tails — Nails

Nanny Goat — Boat/Tote/Coat

Newington Butts — Guts ~ I 'it 'im in the Newingtons.

Noah's Ark — Park/Nark

North and South — Mouth

Oily Rag — Fag. cigarette

Old Pot and Pan — Old man, husband

On the Floor — Poor

Oxford Scholar — Dollar ~ Lend me an Oxford.

Peas in the Pot — Hot ~ It's a bit peasy in 'ere.

Pen and Ink — Stink ~ It pens a bit.

Piccolo and Flute — Suit ~ That's a nice piccolo.

Pig's Ear — Beer ~ I like me glass of Pig's.

Richard the Third — Bird-feathered

Rory O'More — Door ~ Open the Rory.

Rosy Lea — Tea ~ 'ow about a cup of Rosy?

Rub-a-Dub-Dub — Pub

Salford Docks — Rocks

Scapa Flow — Go-hoppit ~ Let's scapa.

Sexton Blake — Cake ~ Pass the Sexton.

Sky Rocket — Pocket ~ Me skies are empty.

Tea Leaf — Thief

Tiddy Wink — Drink ~ Come for a littlle tiddy.

Tit for Tat — Hat ~ I've got a new blue titfer.

Trouble and Strife — Wife ~ It's just the trouble and me at home.

Uncle Bert — Shirt ~ Why 'aven't you washed me uncle?

Uncle Fred — Bread

Uncle Ned — Bed

Weeping Willow — Pillow

Weasel and Stoat — Coat ~ I'll put on me weasel.

Whistle and Flute — Suit ~ D'ye like me new whistle?

You and Me — Tea

2.

以上の例を見て、具眼の士ならみなおわかりのように、右の単語と、左の2語のあとの語尾に rhyme (韻) が踏んであり、それが右の単語を導き出す語呂合せのような役割を果たしているのである。例えば、Aの部の第一行にある――

“Adam and Eve” (アダム, アンド, イーヴ) は、あとの Believe (ビリーヴ) と、「イーヴ」の音で合致する。それなら “Eve” だけでいい訳だが、「イーヴ」と云えば、当然その相手の男性「アダム」が連想されて来る。そこで、恵比須といえば大黒と出て来るように、アダムとイーヴと2つ並べて、believe を意味するしゃれになるのである。Mouth に対する “North and South” も同じ。

Cの部の “Captain Cook” も Book を出すための Cook で、Cook だけだと平凡だから、英国の太平洋開拓の基礎を作った大航海家 James Cook (1728-79) の名を取って個有名詞にしたのである。

特に振っているのは、“Conan Doyle” が Boil を引出すために使われていることである。名探偵 Sherlock Holmes の作者として有名な Sir. Arthur Conan Doyle (1859-1930) の名は、英国はおろか、世界の推理小説愛好家に知れ亘っているから、それを持って来たところがミソである。

Fish を出すのに、往年 (大正時代) の映画女優 “Lilian Gish”

の名を使ったのも、上と同じように有名人を登場させた例だが、この Rhyming Cockney はもちろんそう古いものではない。

Fの部にある “Four by Two” の Jew に至っては、そのものズバリ云いにくいので、数字を当てた。日本語の俗語にもこんな例はある。押韻はもちろん “Tow” と “Jew” の「ウ」であるが、前の “Four” が何か日本のものと似ているようだ。

“Jack Jones” は、alone だが、用例の “’e’s all on ’is Jack” は “on one’s own” のような使い方で、「ひとりぼっちで」、「独力で」の意味で使われる。

また「ちょっと小用を足しに」を表わす “Jimmy Riddle” は “I’m going off for a Jimmy” のように使う。韻を踏む Piddle は Piss（おしっこ）の意である。学校で教った “Nature calls me” より「小」ならこの方が普通であるように思われる。

Oの部の、「1ドル貸してくれないか」のドルを意味する “Oxford Scholar” は傑作である。オクスフォードの学者も飛んだところに使われたものだ。

“Trouble and Strife” の Wife は「山の神」とでも訳すか、いかにも「いつもガミガミ、イザコザの絶えぬ」ことを思わせる皮肉な表現である。この云い方は可成一般に知られている。

これらの Rhyming Slang において、押韻のためによく引出されるのは、動物名である。それもごく人間に親しい Dog, Cat, Pig, Goat のような家畜とか、Bee, Frog, Toad, Mouse, Weasel のような、よく見かける動物で、普通の人知らない珍しいものの名は出て来ない。生物なら

ざる物品や、飲食物や、抽象名詞でも、英国人にとってごくありふれた事物の名称ばかりで、それが、これらの語彙を構成する要素に成っていることが、全般的特徴である。ともかく人口に膾炙^{かいしや}されたものばかりが来る。Stools, Pools に対する April Fools (万愚節とでも訳すか、日本でも原語のままで使う)、然り、Park に対する “Noah’s Ark” (ノアの箱船) 亦然り。

しかし、“Thief” が “Tea Leaf” で、前語のあとと、後語との語尾とが、「イーフ」で合わせてあることはわかるが、前に Tea がついてるのは、二つ合せると Thief の音により近くなるからである。一般に Cockney は非常に早く発音される。また最後の Y の部の “Tea” に当る “You and Me” は、押韻だけなら “Me” の一つでいいが、その前に “You” をつけて、「二人でお茶を飲みましょう」と、お茶というものから直ぐ連想される光景を描いて作り出されたものである。

ここに挙げた例はみな、このように韻を踏み、語尾だけは合っているが、2 語の初めのコトバが出て来た理由は、語によってそれぞれ多少はちがう。それを一々説明しても面白いが、以上で大方の仕組みは了解されたと思うから、あとはクイズのお慰みに残して、話を先へ進めよう。

次は、これら左の二語の用いられ方である。例を見るに (～で示された部分)、これらは、文のうちに、つまり会話のうちに、実際に使われるときの形である。それを見ると、大抵の場合、2 語のうちの初めの方だけが出て来ている。それは何故か？ 実はそれが面白いところで、しゃれはそこに在る。例えば、“Fisherman’s Daughter” (漁夫の娘一水) の場合、“Water” と語尾 (…ter) の韻の合った “Daughter” の方を捨てて、“Fisherman’s” だけを使う。それで話が通じるのか？ もちろんコクニィ同志ならそれで充分なのである。全部云うのはむしろ野暮である。それで、“Gimme (Give me) a drink of fisherman’s” となる。この省略のかたちは、日本語の俗語、例えば「薩摩守」を考えて見ればわかる。「無

賃乗車」つまり「ただ乗り」を「サツマノカミ」と云うことは、誰でも知っている。それは、平家物語に出て来る。和歌、今様の名手、薩摩守の名が平「忠度」だから、「ただ乗り」に引っかけたしゃれの通用語である。だから、平家物語を知る人も知らぬ人も、無賃乗車は「タダノリ」がなくとも、「サツマノカミ」だけでわかる。否、むしろそれをつけない方がユーモラスである。

また、特に習ったこともないのに、聞きおぼえで芸事などが出来る人のことをよく「門前の小僧」と謂う。「いや、ほんの門前の小僧でして」などは、人にほめられて謙遜するコトバである。「門前の小僧」は、そのあとの「習わぬ経を読む」方に意味があるのだが、その方は普通省かれる。丁度それのように、Rhyming Cockney Slang を話の中に使う場合、多く後半のコトバが故意に落されるのである。

語彙 Vocabulary の話は、これくらいにして次に移るが、ここで附言したいことは、Cockney Slang には、上記のような押韻の Slang のほか、無韻の Slang ももちろんたくさんあることだ。(残念ながら、それらをまとめた資料は未だ手に入らないが) しかし Rhyming の方がそれより面白いにちがいないし、またそれらの語源探求となると、Rhyming Slang ほど容易ではない。日本語にたとえて見れば、盗賊のことを「泥棒」と云うが、なぜ「泥の棒」なのか、外人にきかれても答えられる人は先づあるまい。それは語源が余り古いからである。比較的近年(明治以後)出来た俗語「デカ」(「角袖警官」の前半をつめて逆にした隠語)や、「豚箱」(今は「虎箱」も出来た)、「キセル」「バカチョンカメラ」「デンスケ」の如きものなら、説明出来る。Cockney Slang についても同じ事が云える。それで、Rhyming Cockney は、Cockney が発生した時代(17 C 頃)より遙か後世に、或るものは近年に作られたもの(例えば“Sky Rocket”)であるし、また新しいものが、あとからあとから作られることがわかる。それらにはみな「言葉のお遊び」的要素が強く出ている。

次はコクニィの発音（音声）の方を，すこし検討して見よう。語彙の文例の書き方を見るに，“my”と書くべきところを“me”，“Do you”の如き場合，“D’ye”と書いてある（もちろん発音もそうだが）。従って“your”は“yer”(jə)である（“your”は英国英語では，通常必ず「ヨー」(jɔ:)と発音されるのだが）。こういうところが，英語として「べらんめゑ調」なのである。また“h”（特に語頭の）が脱落するのは，一般英国人（オーストラリア人も）の通癖で，“how”は’ow，“have”は’ave，“he”は’e。従って“he is”及び“he has”は，’e’s，“his”は’is となる。因みに他のコクニィ発音の特徴を挙げると，前述のように，“ei”の音を“ai”（又はæ）と云うほか，

th(θ) を“f”に。 例えば：

thing は fink

nothing は ’nafink

three は frei

と発音し，また母音をのばして，

want は wɔ:nt

bed は be:d

と云ったりする。しかしこれは上品なコトバとは考えられていない。コクニィ人のコトバは一般に早口で，声門閉鎖音（glottal stop）が多く，破裂子音（plosive consonants）が発達していて，破擦音（affricates）が耳につく。ともかく，余り口を開かずに物を云う特徴がある。また語法としては，表現法に重複や，逆に省略形がある。例えば，

“He is our friend” と云うところを

“’e’s our mutual friend” (重複)

“Do you see?” を

“D’ see?” (省略)

“How do you do?” を

“’ow do?” (省略)

のような型が使われ、単複数を混同して、

“I’ve five bob (shilling) (複数でない)

“You was here” (文法上 was は were)

としたり、また無生物を擬人化して、

“Have you got it?” を

“’ave you got ’im?” とする。

もちろんこれらは、いただけないコクニィ語法の例であるが、コクニィ人全部がそう云うという訳ではない。またしても江戸っ子を引合いに出して恐縮だが、生粋の東京人でも、みな「ヒ」を「シ」と発音するとは（平井を「シライ」朝日新聞を「アサシシンブン」の如く）限らないのと同じである。因みに、日本の標準語は、明治初年、東京の山の手のコトバを基に造られたものである。「落^おっこちる」「行かなくちゃ」「行っちゃった」「目^めつける」などは東京語ではあるが、日本標準語ではない。ともかく、英語をこんなコトバでしゃべられたら、普通の英語智識では解らないのがあたりまえである。私も実は、ロンドン市中で道をきいたとき、何を云っているのか、殆んどききとれない人に遭ったことが数回ある。そんなのは、相手が外国人だろうが容赦なく、持前のコクニィ弁でしゃべっ

てくれたからである。しかし、これらの slang は、よく検討してみると、どこことなく humorous であり、英国人氣質をよく表わしているように思われる。

だが一体、どうしてこんなコトバが造られたのであろうか？ それに対して、この本の序文にはこう書いてある――

“It has been said that rhyming Cockney slang was originally invented to outwit authority and eavesdroppers. Whatever the reason it still remains a closed language to the uninitiated.”

つまり、Rhyming Cockney slang は元々、権力者のオエラ方や、聞き耳を立てるよそ者をアッと云わせて鼻をあかしてやろうとして造り出されたものと謂われていた。理由は何はともあれ、それは今も尚お、他所者には閉ざされたコトバである」と。しかし、その面白さを認めて、この本の編者は、“But the humour of the rhyming Cockney slang is too good to be missed——”

「なくなるには惜しいものだ」としている。まさに然りである。

コクニィ独特の語彙や語法の例は、先づこんなものだが、それを話す人間はどんな者か？ それは、最初のページの辞書の註にもあるように、「きっすいのロンドンっ子」にはちがいないが、厳密な定義では、London, Eastside (Cheapside) の St. Mary-le-Bow 教会の Bow Bells が聞こえる地域内で生れた人となっている。江戸っ子なら神田の水で、京都っ子なら鴨川の水で生ぶ湯を使った人が、「きっすい」だというようなものである。しかし現在では、London 生れならみなきっすいの Londoner であり、Eastside から発したと謂われる Cockneyese も、ロンドン周辺にまで広く普及している。ただし、あのクラシックな車を運転

するロンドンのタクシードライヴァーなどは、市内の地理に精通していることが就業の条件だから、正真正銘のCockneyeseを話すイキな男が多い。

ここまで書けば、当然 “Cockney” という名称がどこから来たか、何故彼らにその名称がつけられたかを説明しなければならないが、コクニィに関しては、実のところそれが的確にわからないのである。近頃、TVに「ほんとにほんと」というNHK番組があって、それによく語源クイズが出て、おわりにその正解が説明されるが、コクニィに関しては、ウェブスターを始めどんな百科辞典を見ても、英語の Etymology や、Slangの辞書を調べても、ズバリ正解が発見されないのである。

私は、書物の資料のほか、東京で知っている限りの英国人に（NHK国際局欧米部、神田の BRITISH COUNCIL まで）同じ質問を以ってきいて廻ったが、これという決定的解答が得られなかった。だから、私のこれから述べる私見は、独断以外の何物でもないかも知れないが（これについては、博学者のご教示を得たいと思っている）、一応次に Cockney 関係の語源辞典による資料を提示し、それによって私見を述べたいと思う。

Cockney : M.E. Cocken-ey Cock's egg. f. coken gen. pl. of cok
cock + ēy (O.E. oeg egg) : Cock's egg (無精卵) の意味から、「意気地なし」「甘え子」となり、再転して地方人の目から見た「都会人」(?)
「研究社英和大辞典」

Cockney : orig. an effeminate person (E.) Florio has : 'coccherelli, cacklings of hens; also eggs, as we say cockaneys. From M.E. cockenay, a foolish person, ch. C.T.4208: Lit.

「cock's egg; i.e. yolkless egg (黄味のない卵)」 From M.E. cocken, gen. pl. of cok. a cock; and ay, ey. As oeg, egg. See C.S.Burne, Shropshire Folk-Lore. p.229 W.W.Skeat.

(A Concise Etymological Dictionary of the English Language.)

辞典に出ているのはこの程度である。このうち人間に関する「意気地なし」「甘えっ子」から転用された、地方人の目から見た「都会人」(?)と、あとにある“an effeminate person”などがヒントに成るのではないかと思うので、私はコクニィをこんな風に考える——

普通英語の“cock”は、雄雞（中型の鳥の雄も含めて）のほか、「空威張りをする人」「お山の大将に成りたがる人」のような意味がある。諺“A cock crows on his own dunghill”は「内弁慶」「力はないが威勢のいい人」に転意される。だから 17 C 頃からロンドンの EASTSIDE に住みついた「都会人」は、他地方の人から見ると、威勢はいいが、柔弱な「甘えん坊」のように見えたので、Cockney の異名がつけられたのか、或はまた自身でそのように云ったのか、そのいずれかではないだろうか。要するに、コクニィは、その人々の性格を表わすものではないかと思うのである。実際コクニィ人は、意気でいなせなところがあり、雄雞のようにけんか早い^{さつき}が、根は人のいい善良な小市民である。まさに「五月の鯉の吹流し、口先ばかりではらわたはなし」と云った昔の江戸っ子のような人間が多い。コクニィの語源からロンドン土着のコクニィ人に結びつけるこの見解は、確実な文献的資料の確証が見当らない以上、ただ私の一つの臆測 a mere conjecture として附記するに止めて置きたい。

3.

最後に結論として、コクニィという slang の発生原因とその発達とを考察して見よう。それについては先づ、言語生活の素地となる昔から今に至る英国の社会状態にザッと目を向ける必要がある。英国はご承知の通り、産業革命（18 C 後半）以来、200 年の産業基盤を持ち、世界の模範

と謂われた議会制立憲政治の下で社会は安定し、王室と貴族と、労働庶民階級とが共存し、現在は斜陽と雖も、過去の遺産である豊かな社会資本（道路、公園、公共施設等）を保有する、「揺りかごから墓場まで」 From the cradle to the grave の福祉国家 Welfare State である。しかしその一面、素性と学歴を尚ぶ階級社会で、毛並みと学歴とがよくなければ、出世は望めない。早い話が、職場に働く workman は、どんなに腕がよくても、どんなに成績を上げてても、氏素性が低くければ、マネジャーや社長に成ることは、先づあり得ない。政界でも、財界でも、学界でも、毛並みと学歴とが物を云い、その低い者はいつまでも下積みである。腕と才能だけでのし上るなんてことは、英国では余り例がない。上位に立つ者は、みな貴族出身か、名門校を出た者と相場がきまっている。昔、農奴の^{せがれ}だった Captain Cook (1728 - 79) が、太平洋航海で大発見をして、莫大な宝物と広大な領土とを国王に献じて、Royal Navy の Captain に列せられた出世物語などは、例外中の例外である。一般社会では、名誉ある地位に就くには、それ相当の毛並みと学歴とが要求されるのは今も昔も変りはない。それ故、余り資産もなく、氏素性もない一般庶民は、一生社会的地位の向上は期待出来ない。この点、インドのカースト制と似たところがある。云わば、英国は階級的閉鎖社会である。また学歴による差別も、英国では日本以上かも知れない。英国で出世するには、名門校のイートンで学び、オクスフォードかケンブリッジくらいは出ていなければならない。しかしそんな人達は大抵上流階級の子弟である。つまり貴族か富豪の子でなければ、英国では先づ一生ウダツがあがらないということになる。それで、昔も今も階級や職業は大体固定していて、アメリカのように、気軽に転職出来るような社会ではない。考えようによっては、英国は、福祉は充実しているとは云っても、ロンドンの冬の天気のように gloomy な社会である。

そこで、現在、門閥、資産のない中流以下の子弟は、大学は出ても就職難に直面し、職はあっても給料は安く、将来に余り望みがかけられないの

で、外国、特に英語通用国（オーストラリア、カナダ、西ドイツなど）に職を求める者が増えて来ている（1976年8月、私が聞いた話では、大学新卒の国内就職率は、僅か10パーセントとか）。これがもっと下の階級になると、今或る職に在るものは、先づ一生それで通すより他はない。だから英国には世襲の職業が非常に多い。しかし彼らは自分の職業に誇りを有っている。英国はこのように、門閥、学閥社会であり、階級差の大きな保守的社会である。（近年それに少し変化の兆^{きざ}しが見えて来たが、それについては後で述べる）

こう云った社会情勢の下で、当然発生したのが、同階層、同地域、同職業の仲間意識である。これは特に下流（と云っては失礼だが）にいちじるしい。そして、その結束は固い。その結束の固いことを証明する例として、ストライキがある。英国は産業革命で資本主義が確立して以来、労資対立が激化し、ストライキの多い国として有名である。現在でもいろいろな職業組合、つまり労組 Trade Union（英）、Labor Union（米）がストを打つ。数年前ロンドンで起った電力ストのときは、全市民が可成永い間、電灯なしの蠟燭生活を余儀なくされた。一般市民も労働階級の結束の固いことを知っているから、おとなしく止^やむのを待っていた。また2ヶ月も続いた郵便ストがあった。消防のストライキさえ行われる。これは余談だが、英国の空港では、時々荷物をチェックしてから、預けたトランクの物がなくなることがあるが、警察は空港荷役労働者を取調べる事が出来ない。彼らの組合の結束が固くて、警察も手がつけられないからである。また驚いたことには、銀行ストまである。実は私もそれに会い、銀行が一齐に門戸を閉ざしているため、不当なレートで持金をヤミで両替えざるを得なかつた苦^{にが}い経験がある。英国には BANK HOLIDAY という国民休日（8月の第1月曜）があることは承知していたが、バンク・ストがあるとは全く予想もしていなかつた。

ところで話をロンドンの EASTSIDE へ戻して、17 C頃ここへ定着し

た人々は、其後彼らを統治し始めた支配階級に対して、結束を固めた。一体、権力者、すなわち上流支配階級は、下位の者に対して、自己の地位を誇示するために、コトバの端々まで、自分を下じもの者と区別する云い方をしたがるものである。封建時代日本にあった武家コトバがそれである。「さかな屋」と云えばわかるものを、それは町人のコトバだから、わざわざ一般の呼び方を避けて、「魚売人」と云った（講談をおききになればわかるでしょう）。また戦前の法文（警察犯処罰令）には、「スリ」のことを「^{トモウ}掏摸」，「^{タンセキラテイ}肌脱ぎする」ことを「袒裼裸裎」と書いてあった。とにかく authority はむづかしいコトバを使いたがるものである。日本のエライ人達は、昔は漢語、今はやたらに英語をまぜて使いたがる。昔は「是々非々」，今は「ケース、バイ、ケース」に「コンセンサス」。まあそんな訳で、ロンドンの庶民階級は、権力者や上層階級に対して結束し、彼らの社会を造り上げ、コトバも上流の格式張った、堅苦しい表現を避けて、彼ら同志の間だけで通用する階級言語を造り出した。それが時代と共に発達して、コトバにますます磨きがかかり、humour や wit をふんだんに取入れた一種の地域的庶民言語が出来上った。それがコクニィである。英国人は昔から、ユーモアを愛好する国民として知られている。真面目な顔をして、joke を飛ばすのは、上下を通じて英国人の特技であり、国民性とも云っていい。今の日本では、^{かいぎやく}諧謔を不まじめと取る向きがあるが、英国では、極端に云えば、ユーモアのない人間は、文化人として扱わないほどである。上はチャーチルのような戦時中の首相から、下は市井の児童走卒（こんなコトバは今使わないから、下じもの人と云いましょう）に至るまで、ユーモアを愛する。そこで、最初は地域語、階級語として生れた Cockney Slang がしゃれ気の多い一般ロンドン庶民の間に、普及して行った。それは、コクニィの持つ、ユーモラスにくだけた表現が庶民感情にマッチしたためと、一つには formal な上流語に対する対抗意識と云ったものが作用したためかも知れない。おしなべて庶民階級には、日本の落語

に出て来るように、上流用語の堅苦しさを揶揄する気持がある。これを日本語に当てて云えば、「恐れ入る」なんてコトバは、元々武家コトバであるが、これを江戸町人がしゃれのめして、「恐れ入谷の鬼子母神」という、今も使われる洒落文句を作った。上野の入谷に民間信仰の鬼子母神があったからだ。英語にもこんなしゃれ文句があるに相違ない。本稿で取扱った Rhyming Cockney も多分にその色彩を帯びている。

さて、近年の英国社会はどうであろうか。既述のように、英国は階級差の大きな、閉鎖社会であることには変りはないが、最近階級を越えて、上位進出の門戸が開かれる^{きざ}兆しが見え始めて来たようである。ごく最近の例では、英国の保守党党首で、首相候補に擬せられているサッチャー女史 (Mrs. Margaret THATCHER, 愛称 Maggy) である。女史は雑貨商の娘 (と云ってももうお婆ちゃんだが) で、貴族出身ではない。しかし彼女は、ソ連のブレジニェフとも堂々と渡り合い、東側から「鉄の女」と異名を取った^き利ヶ者として知られている。若しこの女性が5月の総選挙で、現内閣の労働党に勝って首相に成れば、英国史上画期的の出来事であるし、ヨーロッパ最初の女性首相でもある。斯うなれば、英国は女王の下に女総理大臣をいただく、世界で類のない女性王国になり、社会情勢も亦変わるかも知れない。ただ彼女が上流階級に好かれない一つの欠点は、英語の発音に、少し上品でない^{なまり}訛 (コクニィ的?) があることだと謂われている。

階級差、名門偏重を打破せんとする他の一つの例は、“Cross Country Test” と称する、近年実施された外交官採用試験制度である。一体、英国では、一人のエリートが9人の非エリートを統御するのが、従来の社会支配の構造であった。それで、この新しい制度は、合宿制により、学習期間中に民間の有能者を学科のほか各種性能テストで^{てき}審査^{てき}拔擢し、外交官に登用する機会を作る試みである。つまり従来はエリートしか入れなかった外務省内部を、実力本位に改めんとするものである。これらの事実は、階級本位の英国の社会各界に新風を吹き込むものとして一般にかんげいされ

ている。また戦後は、英国の王侯貴族が一般に民主化して、その宮殿邸宅を一般に解放（入場料はとるが、中にはホテルもある）するなどして、一般人との接触を計っている。たとえそれが斜陽貴族の事業であっても、英国社会の上下の接触は、戦後の英国社会に於ける一つの水平化現象と謂えなくもない。しかし、それはあくまで接触であって、それで階級差がなくなったという訳ではないが。そう云う社会情勢によって、市民の言語生活も変って来た。曾ては特種語であったコクニィが、slang から立派に全庶民的 London dialect「ロンドン言葉」と云える地位までのし上った。また戦後は、米語が混入したことも見逃がせない傾向である。それらが上流英語にも影響を与え、formal だった上流英語も、いく分 colloquial に成ったと謂われている。それもそうであろう。昔は格式を重んじた英国貴族も、今はラフなスタイルで庶民の中に交り、気さくに振舞っておられるのだから。尚、英国社会の現状については、いわゆる「英国病」（ストの多発、勤労意欲と労働生産性の低下、旧植民地住民の英国流入、福祉の過保護等に依って起った）を述べるべきだが、それは本題に直接関係がないから言及しないで置く。

上述のような、近年の社会情勢の変化のために、現在コクニィを話す人、必ずしも辞書にあるように、下層、低級とは限らない。一般のロンドン市民も仲間同志の会話では、このコトバを愛用している。またコクニィの語彙も一般化した。日本語でも、元は特種語だった「インチキ」「チンピラ」「ヤバイ」「ドジ」などの卑語も普通に知られているし、「ザックバラン」なんてコトバは、元はと云えば、江戸職人の伝法コトバ（「コー、コー、コー、こちとらァ江戸っ子でェ、気が短けえんだ、ザックバランに云っちくんねェ」と云った式の）から出たものだが、今は平均的日本人なら誰でも frankly speaking の意味で使う。それは、まともなコトバよりこの方がピツタリ来るからである。しかし、生粋のコクニィ弁となると、それを話す人の数は伝統を尊ぶ英国でさえ、さすがに少くなりつつある。それでロン

ドン当局も、ENGLISH DIALECTS の資料として、それらの人を集めて調査したり、テープに録音したり、色々な方法を講じている。私も BRITISH COUNCIL でそのテープを聞かせて貰ったが、標準英語と比較すると非常に面白い。ともかく、一つの地域に、数世紀の伝統あるコトバが、そのまま純粹に残っていることは、非常に興味深いことである。

私もロンドン滞在中、あの本でいくらかコクニィをおぼえたので、英国人と話すときなど、cockneyize して、“Let’s scapa! I must get me weasel.... Just ^{タイク}take a butcher’s at that!” なんて云って見たくなったが、外国人としてキザだから控えて置いた。くだけてしゃれたコクニィは面白いが、やはり外国人は、英語なら formal でも、格調ある King’s English, 今なら Queen’s English を学ぶべきであることには間違いない。

参照：Jack Jones “Rhyming Cockney Slang”

参考：W.W.Skeat “A Concise Etymological Dictionary of the English Language”.

“A Short Etymological Dictionary of Modern English”

G.L.Brook “English Dialects”

三修社「音声学大辞典」

岩波全書「英語発達史」

後記：本稿は、問題が COCKNEY SLANG というくだけた俗語だけに、日本文の方も論文調ではなく、可成くだけた口語で書きました。表現が不適正だったらご容赦願います。